「暗夜行路」における段落の構成について

――文章の音声学的研究――

永尾章曹

段落についての考察、就中段落に関する基礎的な問題についての考察は、従来、その例をあまり多く見ないようである。このことは、段落の、考察の対象としての性格のあいまいさに起因するとも、考察の成果についての、研究上の期待が薄いことによるとも考えられるであろう。わたくしは、こうした段落について、これを文章研究の一環としてとりあげることにより、その、考察の対象としての性格をたしかめ、考察の成果についての、研究上の意義を見出していくことができるのではないかと考える。本稿は、そのためにする、段落についての特殊な一考察とでもいうべきものである。

「文章の音声学的研究」とした副題は、一見奇異な感をまぬかれ得ないかとも思う。段落についての考察には、多くのばあい、おそらくは段落自身の性格のあいまいさからもたらされるのであろう論点の浮動性が見受けられる。本稿においては、段落の形式面、ことに音声面を意図してとりあげることにより、段落についての、問題の論点を一面的にではあるが厳しくし、その点において、段落について考察するための手がかりを求め、段落のもつ、一面の性格について考えてみたいと思うのである。

この小論で、直接の対象とする作品は、「暗夜行路前篇」である。テキストには、岩波書店刊行の、「志賀直哉全集」の第七巻「暗夜行路前篇」を用いる。

さて、当面考察の対象とする段落は、次のようにして定める。段落は、一字下げという形で始まり、行かえという形に至って終るという形式上のめやすをもって認める。が、その際、会話あるいは会話に準ずるものにおいては、段落の切れ目としての行かえを確かに知ることが困難であるということがある。地の文と会話との間に性格上の差異のあることとあわせて、これを除外しなければなるまい。第一に、一段落中に、会話・心情の表現・日記・夢・回想・解説があるばあい、それが一個の文として認められるものであれば、その文を含む段落は考察の対象としない。それが一個の文でなく、地の文の部分としてあるものは、もちろんこの範疇には入らない。第二に、会話の後接する段落においては、行かえの確認は困難である。これも考察の対象とはしない。これだけの手続きを経て、残る段落が三百七十二段ある。この小論は、これを考察の対象とする。

第一の作業は、それぞれの段落が、それぞれいくつの文によって構成されているか調査することである。文は句点をもって終止するものと考える。句点のあるごとに文を認め、数を数えることとする。ところで、句点は、文章中での音の休止の一形式でもある。一個の文は、一個の音声連続を意味するとも言えよう。文の数を数えることは、音声連続の数を数えることであるとも考えられるわけである。個々の段落が、いくつの音声連続によって構成されているかを調査し、そのありようについて考察してみたいと思うのである。

「暗夜行路前篇」中の三百七十二段を、文の数によって分けると次のようになる。

〔第一表〕

文の数	段数
1	72
2	94
3	78
4	31
5	33
6	29
7	14
8	8
9	4
10	2
11	2
12	1
13	1
14	2
15	1

文の数二の段落がもっとも多い。が、そのことは一応置く。注目すべきは、文の数三までの段落が特に多いことである。言いかえれば、音声連続三までの、音声連続の数のきわめて少ない段落が特に多いのである。ほぼ六十六％を占める。次いで、文の数四から六までが二十五％を占める。あわせて九十％以上が文の数六までの段落で占められているわけである。以下、文の数七から十五まで、段落数は漸減していく。

「暗夜行路」を読むとする。読みかたとしては、黙読、音読、朗読などさまざまな形式がある。いずれのばあいにも、テキストを見て読むという点では差異がない。が、ここで、読むに対して聞くという立場のあるばあいを想定してみる。聞き手自身が、読み手と同じく、テキストを見ながら聞くということもあり得る。が、その反面に、聞き手はテキストを持たないで、読み手の音声のみを頼りとするばあいもあり得る。テキストを見ながら読み、そして聞くばあいには、前述のような段落は、行かえという形を、行かえにともなう空白によって目で確めることができる。が、音声のみを頼りとするばあいは、段落はどのようにして知られるであろう。以下、音声のみを頼りとして、段落を知るばあいの問題点をとりあげてみたいと思う。ただ、現在のところ、私はこうしたことがらについての、実験的な記録を持ちあわせない。やむをえず、私のとぼしい日常の経験と、今この「暗夜行路」を私自身が実験的に読みかえすことによって得られたものとに従って、この問題について考えなければならなかった。

二つの連続した段落があるばあい、二段落間の切れ目を音声の上で感得させるものは何であろう。まったく段落について無頓着であるというばあいを別として、何らかの特徴が見出されるのではなかろうか。二段落の間に置かれる、音声の休止のことがまず考えられる。が、この、休止によって切れ目を知るということは、さほど明確な結果をもたらさない。少なくとも、休止そのものの長短で切れ目を知るということには自らなる限界があると思われる。むしろ、二つの段落のうちの、前の段落と後の段落との、それぞれにともなう音調上の特殊な事象が見逃せないように思われるのである。

前の段落では、とりわけその終りの部分に、後の段落では、その始めの部分に音調上の特色があらわれやすい。そして、両者を比較して言えば、ことに後者にそれがあらわれやすいようである。もちろん、前者のばあいにも特色があらわれないわけではない。意図して、終りの部分を強く言い切るということもあり得る。特に、そこが段落の終りである故に、特殊な文が位置しているというようなことがあるばあい、その特殊な文の、特殊な音調があらわれるというようなこともある。が、「暗夜行路」について言えば、段落が比較的少ない数の文によって構成されているということもあり、後に述べるように、特殊な文が段落の終りに位置することが少ないということもあって、前者に音調上の特色があらわれることは比較的少ないようである。むしろ、後者にそれがあらわれやすいのである。後者について、二、三の問題点を指摘しておきたい。

まず第一に、音調の強さ、弱さの問題がある。これは、対象とする文章の性質によっても異なることであって、一概に強いだの、弱いだのということのできるようなことではないが、そのいずれかが段落の始めにあらわれやすいという意味で注目されるのである。「暗夜行路」においては、私のばあい、段落の始めを弱く発するのが普通のようである。読み手によって、段落の始めを弱く発するということもあるのではないか、そういうことが多いのではないかとも思われるのである。「暗夜行路」においては、段落の始めに、特に意識しなければならない、ものがあることは少ない。段落の切れ目は、ものの区別による切れ目ではなく、流れの中断による切れ目であろうと思われる。段落の始めを弱く発するということは、弱く発することによって、聞き手を（自分自身であってもよい）、流れの中に誘い込もうとするものとも考えられる。そして、それが段落の切れ目を感じさせるものだとも思われるのである。

第二に、音調上の速度の問題がある。速度という点では、段落の始めは普通ゆるやかであるように思われる。新しい段落の始めを慎重に始めようという気

持からであろうか。新しい段落の始めにあたって、新しく態勢を作る必要があってのことであろうか。「暗夜行路」のばあい、段落の多くは比較的短い段落であって、ゆるやかさの根拠を見出すことが困難とも言える。が、比較的長い段落において、段落を通じて、段落の始めに作られた態勢からの、読み調子が持続されることは無視できない。ゆるやかさは、ゆるやかであることと新しい態勢を作る構えという点で、聞き手を流れの中に誘いこもうとしているとも考えられる。そして、このゆるやかさが段落の切れ目を感じさせるのだとも思われるのである。

経験的に知られる、以上の二つのことから、音調上の強弱と速度とが、段落の切れ目を感じさせるようだということは無視できない。比較的、一つ一つの段落の、文の数が少ないという特色のある「暗夜行路」においては、それを読むばあい、こうした音調上の強弱や速度の変化からもたらされる特色が見出されるのではないかと思われるのである。文の数は音声連続の数でもある。「暗夜行路」においては、比較的少数の音声連続によって、構成される段落が、いくつも続くということが決して少くない。段落と段落との間の切れ目ごとに、音調上の強弱や速度の変化があらわれるとすれば、「暗夜行路」においては、それを読むばあい、音調上の強弱や速度の変化が短い間隔をおいてあらわれ、読みの調子は、変化に富んだ様相を示すと思われるのである。

さて、ここで第二の作業に移ることとする。第二の作業は、個個の段落を構成する、個個の文の最終末尾音のありようについての調査である。

文の末尾の音について調査したばあい、「暗夜行路」においては、まず、「た」の音で終る文がきわめて多いということが注目される。そして、その音「た」は、すべていわゆる過去・完了の助動詞「た」である。音声という形をとりあげての考察においてもこのことは確めておく必要があろう。音声「た」には、ことばとしての「た」の意識が常にともなうからである。形は同一であっても、それを意識する際、別のものと考えられるものについては、それを区別するだけの配慮が、言語音声についての考察には必要だと思われるのである。

この点で、いわゆる、「た」の濁った「だ」についてふれておきたい。たとえば「母は私をにらんだ」というばあいの「だ」である。音韻の上でも、無声と有声の区別があり、音声の上でももちろん異なる。が、ここでは「だ」を「た」の濁ったものとみる習慣が無視できない。本稿においては、これを「た」と同一のものとみなすことにする。これに関連して、いわゆる指定の助動詞「だ」のこともある。このばあいには、前記の「だ」と同一の形であるけれども、習慣上、これを同一のものと意識できるかどうかに疑問がある。少なくとも「た」と同一視することはできまい。が、一応問題があるものとして、保留しておき必要に応じて配慮を加えたいと思う。

さて、「暗夜行路」の、文の末尾の音に「た」がきわめて多いことはすでに述べたとおりである。この点をまず出発点としたい。段落ごとに、段落を構成している個個の文の、末尾の音を調査し、音「た」を末尾の音とする文のみで構成されている段落、その他の音を末尾の音とする文のみによって構成されている段落、音「た」である文とその他の音を末尾の音とする文をまぜあわせて構成されている段落というように、段落を分類してみると、次の第二表のようになる。

〔第二表〕

文の数	末尾の音「た」のみ	末尾の音その他のみ	混合
1	72		
2	86	2	6
3	62	2	14
4	24		7
5	25		8
6	18		10
7	7		8
8	5		3
9	1		3
10	1		1
11	1		1
12			1
13	1		
14	1		1
15			1
16	304	4	64

まず第一に注目されることは、末尾の音が「た」である文のみによって構成された段落が、三百七十二段中、三百四段にものぼり、きわめて多いということである。文の数一の段落を除いても、二百三十二段も見られるのである。文の、末尾の音についていうかぎり、個個の段落は、音「た」をもって一定していることが多いと言わなければならない。音「た」は文の末尾の音としてある。それには後に休止をともなうということもある。読むばあいにはやはり目だった音として受け取られよう。その音が一定であることが多いということは軽視できない。文の、末尾の音が一定であることにより、読みの調子が安定を得るということはないであろうか。「暗夜行路」を読んでいくばあい、いくらかの間隔を置いて、目立つ位置にある音として「た」があらわれることが、読みの調子に安定度を加えているように思われるのである。「暗夜行路」は、読んでいくばあい、文の数の少ない段落が多いところから、音調の強弱、速度の変化が短い間隔であらわれ、そこに読みの調子の変化のあらわれやすいことはすでに述べた。それに対して、文の、末尾の音が一定の「た」で終る文により構成された段落の多いことから、段落の読みの調子に安定度が加えられるということがあるようである。読みの調子という点で、「暗夜行路」には、一面において、変化があらわれやすいという点が、他の一面において、安定度が加えられるという、相反する二面が共存しているとも考えられるようである。

第二表については、次のような点も一応注目される。末尾の音が「た」以外の音である文のみによって構成された段落が、わずかに四例だけ見られるということである。こうした段落には、それとしてのそれなりの特殊性も考えられようが、それは、表現効果とか意味とかの面においてのことであるとも考えられよう。音声という面では、これらの文もまた、「た」ではないけれども、その他の一定の末尾の音によって、安定を得ている段落であるということもできるのである。

第二表について、混合の段落をとりあげ、以下考察をすすめてみたい。なお、従来混合の段落とは、末尾の音「た」の文とその他の音の文との混合とのみ述べて来たが、一段だけ、末尾の音をつらねて言えば「ク・ル・ス・ル・ス」となる段落があり、これを混合の段落に加えることとする。

混合の段落は、第二表に見られるとおり六十四段見られる。まず、各段落ごとに、段落を構成する文の、末尾の音「た」を基調の音と呼ぶことに定め、その基調の音にどのように他の音が混入されているか調査してみたい。基調の音「た」の中に、その他の音が混入される回数が一回だけのものが、六十四例中の五十二例と圧倒的に多い。ただし、ここにいう「回数が一回」の意味は、ある一つの音が、一つの段落中に一つだけあるということではなく、たとえば末尾の音をつらねていって「タ・タ・ル・ル・タ」というように、混入された音が「ル・ル」と連続してあるばあい、この連続した「ル・ル」は一まとめにして、一回と数えたものである。基調の音「た」の中に、その他の音が混入される回数が二回以上のものは十一例である。前掲の「ク・ル・ス・ル・ス」の段落を加えて十二例である。

混入の回数が一回だけのばあいを中心に、混合の段落について考察していくこととする。文の数二の段落で、混合の段落である段が六例見られる。そのうちの一例は、第二文の末尾が、いわゆる指定の助動詞「だ」のばあいであるから、それを除けば五例である。

1　不潔なじめ〳〵した路次から往来へ出る。道幅は狭かつたが、店々には割りに大きな家が多く、一体に充実して、道行く人々も生々と活動的で、玉の岩の玉を抜かれた間抜な祖先を持つ人々には見えなかつた。（138頁・上段）

2　山谷の方から来る人々と、道哲から土手へ入つて来た人々と、今謙作が来た三の輪からの人々とが、明かるい日本提署の前で落合ふと、一つになつて敷石路をぞろ〳〵と廓の中へ流れ込んで行く。彼も其一人だつた。（46・上）

用例の後のかっこ内の数字と上・下とは、テキストの頁数と所属の段を示す。例1の二つの文の、末尾の音をつらねると「ル・タ」、例2では「ク・タ」となる。例1の「ル」、例2の「ク」を、「タ」を基調の音と呼ぶのに対して破調の音と呼ぶことにする。基調の音、破調の音を記号化して、前者を「○」で、

後者を「×」であらわすこととすると、この二例は、「×・○」の形であらわせる。以下、これにならって例を処理することとする。なお、類例として他に「ル・タ」の例が二例見られる。「×・○」は合計四例である。

3　かう思はず思つて、彼ははつとした。これは自分でも答へる事のいやな、然し答へる事の出来る問ひだつたからである。（87・下）

例3には「タ・ル」が見られる。「○・×」の形である。例1・2に対して例3は逆の関係にある。前者の類は四例、後者は一例、指定の助動詞「だ」が第二文の末尾にあるものを加えて二例である。前者が優勢である。

文の数三の段落で、混合の段落であるものが十四例ある。これを中心に、関連した問題も含めて考察を進めることとする。

4　女の人は二十二三だつたかも知れない。然し細君になつた人を見ると誰でも自分より年上のやうな気のする謙作にははつきりした見当はつかなかつた。其人は友達と話すやうな気軽さと親しさで女中と何か話して居た。（70・下）

5　勿論、此変化は一つは登喜子の態度で導かれたものである。が、それよりも彼は愛子との事で、かう云ふ事には変に自信がなくなつて居た。そして、この自信なさが、知らず知らず此落着に彼を満足させようとして居るらしかつた。（53・上～下）

6　或る彼はもつと突き進みたがつて居る。然し他の彼がそれを怖れた。愛子との事で受けた彼の傷手はそれ程に未だ、彼には生々しかつた。（53・下）

例4には「イ・タ・タ」、例5・6には「ル・タ・タ」が見られる。「×・○・○」の形である。段落の最初の文の、末尾の音が破調の音なのである。これらには注目すべき特徴がある。破調の音で終る第一文に続く、第二文が、例4では「然し」、例5では「が」、例6では「然し」といずれも逆接の接続詞をもつて始まっているのである。まず考えられることは、内容上の特殊性がこうした型をもたらしたのではないかということである。と同時に、音声の上でもこれらの接続詞のあることは無視できない。これらを読むばあい、接続詞には、やはり特殊な音調が与えられると思われるからである。これらの例を、内容上の特殊性が、段落の最初の文の、末尾の音に破調の音を選ばせ、それに続く第二文の始めにも音調上の特殊性をもたらしたとは考えられないであろうか。例外がないという意味で、内容上の特殊性が、音声の上での特殊性に結びついた顕著な例であるとも考えられるのである。文の数三以外の段落にも、段落の最初の文の、末尾の音が破調の文である例を見出すことができる。次のような例である。

7　本社へ上る急な石段がある。その前が殊にいいやうに思つた。然し本社から奥の院までの道は、最近に作つたものらしく、人工の美は皆無だつた。只、尾の道で松ばかり見てゐた眼に色々変つた山の大きい木が物珍らしかつた。が、その内、不図その木の肌を気味悪く思ひ出すと、彼の弱つた神経は、それから甚く劫かされた。（156・上～下）

8　其二年程前に木場からその辺、それから砂村を通つて中川べりに出た事がある。それ故、道は大概分つてゐた。彼は永代橋を少し行つた所で電車を降りると、沈んだ不愉快な顔をしながら八幡前の道を歩いて行つた。どれ程陰鬱な、そしてどれ程醜い顔つきであるか、自身でも感じられた。道行く人々が皆、彼の目的を知つてゐるやうに彼には思へた。彼はそれらの人々に淡い一種の敵意さへ感じた。そして急いだ。時々空つばを呑み〳〵彼は急ぎ足で歩いて行つた。（111・上～下）

例7には「ル・タ・タ・タ・タ」、例8には「ル・タ・タ・タ・タ・タ・タ・タ」が見られる。「×・○・○　……」の形である。これらの例には、前掲の例4・5・6のような端的な特徴は認められない。が、例7において、第一文と、「本社へ上る急な石段」に対する「本社から奥の院までの道」という点で、緊密につながる第三文が「然し」で始められる事、例8において、第二文が「それ故」で始められる事を、前三例の特徴に比することはできまいか。例7のばあい、第三文にそれがある、例8のばあい、逆接の接続詞ではないという差異はあるけれども、こうしたことも無視できないのではなかろうか。

なお、次のような問題もある。例5・6は連続した段落である。連続して同型の段落が見られるということに意味はないであろうか。後にあげる例15と例16とのばあいや例14のばあいにも同様であって、類例を見出すことはできるのである。同型の段落が連続してあるばあい、同型の、読みの調子が考えられるという意味で、一応問題を残しておく。

次に、文の数三の段落のうち、「○・×・○」の形のものをとりあげる。

9　一ト月ばかりは先づ総てが順調に行つた。生活も、仕事も、健康も。然し一ト月も終りの頃から、少しづつそれが乱れて来た。（143・上～下）

10　彼は低い窓障子を開けて、其処から外の景色を眺めた。石垣の上が暗い往来で、向側に五六軒破風を竝べて、倉庫がある。新地から宿屋へ呼ばれて行く芸者だらう。三四台続いた俥の上で互に浮かれた高調子で、何か云ひ合ひながら通つて行くのが其暗い中に見られた（175・下）

例9には「タ・モ・タ」、例10には「タ・ル・タ」が見られる。他に、「タ・ル・タ」が一例、指定の助動詞「だ」を末尾に持つ文を中にはさんだ段落が二例見られる。「○・×・○」の形である。「○・×・○」の形は、破調の音が三つの文の真中にあるとも考えられるし、破調の音が第二文にあるとも考えられる。どちらに受け取っても、こうしたありようは、文の数三以外の段落にその類例を見出すことができるものである。前者の類例としては次のような例がみられる。

11　彼は茶店の主から聴いて、先頃死んだ商家の隠居が住んでゐたと云ふ空家を見に行つた。枯葉朽葉の散り敷いたじめ〳〵した細道を入つて行くと、大きな岩に抱へ込まれたやうな場所に薄暗く建てられた小さな茶室様の一棟があつた。が、それが如何にも荒れはててゐて、修繕も容易でないが、それよりも陰気臭くて迚も住む気になれなかつた。彼は又茶店まで引きかへして、石段を寺の方へ登つていつた。大きな自然石、その間に巌丈な松の大木、そして所々に碑文、和歌、俳句などを彫りつけた石が建つてゐる。彼は久しい以前行つた事のある山形の先の山寺とか、鋸山の日本寺を憶ひ起した。開山が長崎の方から来た支那の坊主といふだけに岩や木のたたずまひから、山門、鐘楼、総てが、山寺、日本寺などよりも更に支那臭い感じを与へた。玉の岩といふのは其鐘楼の手前にあつた。小さい二階家程の孤立した一つの石で、それが丁度宝珠の玉の形をしてゐた。（137・上～下）

「タ・タ・タ・タ・ル・タ・タ・タ・タ」が見られる。他に、「タ・タ・タ・タ・フ・タ・タ・タ・タ」という例、「タ・タ・タ・タ・タ・タ・ル・タ・タ・タ・タ・タ」という例も一例ずつ見られる。段落の真中の文の、末尾の音が破調の音なのである。一つの型が認められるようである。他に、指定の助動詞「だ」を、基調の音「た」「だ」と区別しないとすれば、次のような例も見られる。

12　鐘楼の所からは殆ど完全に市全体が眺められた。山と海とに挾まれた市は其細い幅とは不釣合に東西に延びて居た。家並もぎつしりつまつて、直ぐ下にはづんぐりとした烟突が沢山立つてゐる。酢を作る家だ。彼は人家の少しづつ薄らいだ町はづれの海辺を眺めながら、あの辺にいい家でもあればいいがと思つた。（137・下）

例11に続く段落である。「タ・タ・ル・ダ・タ」が見られる。「だ」を「タ」とすれば、「○・○・×・○・○」であり、「だ」を「タ」としないなら、「○・○・×・×・○」である。前者と認めるばあいには、例11とあわせて、同型の段落が連続している例に数えられるわけであるが、「だ」で終る第四文は極端に短く、この短いということにより、音調上の特色さえもなりたちそうである。この点で後者と認める方がよいとも考えられる。後者と認めたばあい、連続した、末尾の音が破調の音であるものを一まとめにして、「○・○・×・○」の形が認められることになる。この形式は、後に多く見られるものである。

それはともかく、段落の真中の文の、末尾の音が破調の音である一類のあることは認められるようである。

次に、文の数三の段落のうち、「○・○・×」の形のものをとりあげることとする。

13　母に死なれてから此記憶は急に明瞭して来た。後年もこれを憶ふ度、いつも私は涙を誘はれた。何といつても母だけは本統に自分を愛して居てくれた、私はさう思ふ。（8・下～9・上）

「タ・タ・フ」が見られる。他に「タ・タ・フ」という例、「タ・タ・ル」という例が一例ずつ見られる。「○・○・×」の形である。この形に関連して、次のような例のあることも見逃せない。

14　四つか五つか忘れた。兎に角、秋の夕方の事だつた。私は人々が夕餉の支度で忙しく働いてゐる隙に、しも手洗場の屋根へ懸け捨ててあつた梯子から誰にも気づかれずに一人、母屋の屋根へ登つて行つた事がある。棟伝ひに鬼瓦の処まで行つて馬乗りになると、変に快活な気分になつて、私は大きな声で唱歌を唄つて居た。私としてはこんな高い処へ登つたのは初めてだつた。普段下からばかり見上げてゐた柿の木が、今は足の下にある。（8・上）

「タ・タ・ル・タ・タ・ル」が見られる。一段落中に二度、破調の音の文が見られる例であるが、これを「○・○・×」の形を二度くりかえす段落とみられないこともない。前にあげた例5・6のばあいや次にあげる例15・16のばあいとあわせて問題があるとも言えよう。

15　セメントに小砂利を混ぜたのを畚賃で陸から運ぶものがある。頬髯のいかめしい土方がそれをシャベルでならしてゐる。一方では其上へ蓆を敷いて、向ひ合つた二人が、堂突きで、よいさ〳〵と突いて居た。（121・上～下）

16　背広に日本脚絆をはいた男が測量をして居る。其彼方で、丸太を二本立て、それへ貫き板をX字なりに打ちつけてゐる者がゐる。そして、其下の油のギラギラ浮いた水溜で顔を洗つてゐる女労働者があつた。（121・下）

例15・16ともに「ル・ル・タ」が見られる。他に同じ例がもう一つ見られる。「×・×・○」の形である。が、このばあい、音「ル」が二つあり、音「タ」は一つである。数の多い方を基調の音とすれば、「○・○・×」の形が得られることとなる。音そのものの差異を無視して、段落の構成という点からのみみれば、この方が適当だとも考えられよう。「○・○・×」の類例と認めることにする。

なお、例15・16は連続してある段落である。すでに述べたように、例5・6のばあいや例14のばあいとあわせ考えて、同型の段落が連続してくりかえされるという型があるのかもしれないと考えられるものである。読んでいくばあい、音調上の問題としても、これが意識される点で見逃せない問題があるということもできよう。

「○・○・×」の形式を、一段落中の最終文に破調の音の文が位置する形式とすれば、これの類例は、文の数三以外の段落にも見出される。

17　竜岡と別れた事は何といつても彼には淋しい事だつた。竜岡は芸術には門外漢らしい顔を何時もしてゐたが、自身の仕事、飛行機の製作、殊に其発動機の研究に就いては、そしてそれに対する野心的な計画を話す時などには彼は腹からの熱意を示し、よく亢奮した。謙作は仕事は異つていたが、さう云ふ竜岡を見る事で常にいい刺激を受けた。今、さういふ友を近くに失つた彼は本統に淋しい気がされたのである。（129・下～130・上）

「タ・タ・タ・ル」が見られる。この他に「タ・タ・タ・タ・タ・タ・ル」というのが一例、「タ・タ・タ・タ・ガ」というのが一例、さらに、段落の、最後の文の末尾が指定の助動詞「だ」で、「タ・タ・タ・ダ」というのが一例見られる。文の数三の段落の「○・○・×」という形以下、段落の最後の文の、末尾の音が破調の音であるという一類を認めることができるようである。

さて、文の数三の段落を中心とした考察は以上で終り、次に、文の数四以上の段落で従来とりあげていないものについての考察に移りたい。

まず、次のような例がある。

18　後年私は、何故それ程、困りもしないのに祖父はあんな暮らし方をしたらうと、よく考へた。月々困らぬだけの金は父から来てゐたのである。それなのに、祖父はがらくた道具の売り買ひをしたり、がらくた道具屋の競売に家を貸して席料を取つたりした。まうけづく以上、祖父の趣味のやうにも思へ

た。（11・上～下）

「タ・ル・タ・タ」が見られる。「○・×・○・○」の形である。段落の第二文が破調の音である形式とみる。その意味での類例には、「タ・ル・タ・タ・タ・タ・」が二例見られる。他に第二文の末尾が指定の助動詞である「タ・ダ・タ・タ・タ」が一例、「タ・ダ・タ・タ・タ・タ・タ・タ」が一例見られる。

次のような例もある。

19　塩屋、舞子の海岸は美しかつた。夕映を映した夕なぎの海に、岸近く小舟で軽く揺られながら、胡坐をかいて、網をつくろつてゐる船頭がある。白い砂浜の松の根から長く綱を延ばして、もう夜泊の支度をしてゐる漁船がある。謙作は楽しい気持で、これらを眺めてゐた。そして汽車が進むに従つて夜が近づいた。彼は又睡むくなつた。眼まぐるしい、寝不足続きの生活の後では幾ら眠つても眠足りなかつた。彼は食堂へ行つて、簡単な食事を済ますと、和服に着かへて空いてゐる座席に長くなつた。そして十一時頃ボーイに起され、尾の道で下車した。（133・上）

「タ・ル・ル・タ・タ・タ・タ・タ・タ」が見られる。第二文と第三文の、末尾の音が破調の音である。連続している破調の音を一まとめとして考えると、「○・×・○・○　……」の形が得られることとなる。類例には、「タ・カ・ル・タ・タ・タ」が一例見られる。段落の、第二文或いは第二文相当個所に、破調の音の文が位置する一類を認めることができるようである。これに関連して次のような例もある。指定の助動詞「だ」で終る文、いわゆる形容動詞の語尾の「だ」で終る文を含む段落である。

20　二度目に登喜子と会ふ前と後では不思議な程に謙作の気持は変つてゐた。彼は今も登喜子を美しく思つてゐる。そして好きだ。然し其美しく思ひ方も、好き方も、前の変に重々しく息苦しかつた時に較べて、妙に軽快なものになつて居た。彼は漸く落ち着けた。彼は前の自分を想ひ、全体何を目がけて、あれ程にも力瘤を入れ、あれ程にも一人先走りしたものか解らない気がした。（53・上）

21　彼は寝ながら持つて来た本を拡げたが、どうしても、それに惹き込まれて行かなかつた。暗い淋しい気持が廻りから締めつけて来る。彼はそれにおさへられ、身動きもならず、只凝然として居るより仕方ない気持だつた。実に静かな夜だ。そして寒く、火のある部屋でも頬は冷えく〳〵と、未だ足の先は温まりきらずにゐた。（160・上）

例20には「タ・ル・ダ・タ・タ・タ」が、例21には「タ・ル・タ・ダ・タ」が見られる。「ダ」を破調の音とみなければ、両者ともに第二文が破調の音の文である段落とみられる。「ダ」を破調の音とみれば、例20は、第二文の「ル」と第三文の「ダ」とを一まとめにして、第二文相当個所に、破調の音の文がある例と認められる。例21は、後にあげる、基調の音と破調の音とが交互にあらわれる一類に移されることになる。

次に、量的にもっとも多く、特色ある一類に移ることとする。

22　ポツリポツリ雨が落ちて来た。三人は可成り疲れて居た。結局其辺の茶屋で少し休んで行く事にした。筆太に色々な屋号を書いた行燈を出した同じやうな家が両側に軒を並べて居る。三人はいい加減に西緑と書いた、其一軒に入つた。（34・下）

「タ・タ・タ・ル・タ」が見られる。段落の終りから二番目の文が、破調の音の文である。こうした形式の認められる類例は多く、注目すべき一類かと思われる。類例としては、「タ・タ・ル・タ」が二例、「タ・タ・タ・タ・ル・タ」が一例、「タ・タ・タ・タ・タ・ル・タ」が一例見られる。他に「タ・タ・イ・タ」が二例、「タ・タ・タ・イ・タ」が一例見られる。指定の助動詞「だ」が、終りから二番目の文の末尾にあるものも一例ある。

次のような例もある。

23　景色はいい処だつた。寝ころんでゐて色々なものが見えた。前の島に造船所がある。其処で朝からカーンカーンと鉄槌を響かせて居る。同じ島の左手の山の中腹に石切り場があつて、松林の中で石切人足が絶えず唄を歌ひながら石を切り出してゐる。其声は市の遥か高い処を通つて直接彼のゐる処に聴

えて来た。（140・上）

「タ・タ・ル・ル・ル・タ」が見られる。第三文・第四文・第五文の音「ル」を破調の音として一まとめにすると「○・○・×・○」の形が得られることになる。類例としては、「タ・タ・タ・タ・ル・ル・タ」が一例見られる。これらの例も含めて「○・○・……×・○」の一類を認めることができよう。

一段落中に、破調の音の文が一回だけ見られる段落のほとんどはすでにあげた。残るは三例のみである。

24　彼は未だ睡むかつた。四五日続いた寝不足は、二時間ばかりの睡眠では何にもならなかつた。彼は又寝床へ入つた。船は可成に揺れてゐた。それに船室が船尾に近い為めに、舵を動かす太い鎖が絶えずグロッ〳〵と変な響をたてる。それが耳について眠れなかつた。ダン〳〵〳〵と云ふ機関の音に混つて、推進機に押される、シャア〳〵と云ふ水音も聴えた。（129・上）

「タ・タ・タ・タ・ル・タ・タ」が見られる。残る二例も「タ・タ・タ・ル・タ・タ」「タ・タ・タ・ク・タ・タ」という例である。段落の終りから三番目の文が破調の音の文であり、「○・○・……×・○」という形の一類を認めることができるようである。

さて、以上の類型を一応ここで整理してみたい。破調の音の文が一回だけ見られる段落においては次のような六種の類型が得られる。段落の第一文が破調の音の文である一類（A）、第二文及び第二文相当個所に破調の音の文が位置する一類（B）、段落の真中の文が破調の音の文である一類（C）、段落の終りから三番目の文が破調の音の文である一類（D）、終りから二番目の文及び二番目相当個所に破調の音の文が位置する一類（E）、一番終りの文が破調の音の文である一類（F）という類型が得られるのである。

まず、かなり整然とした分類が得られることに注目しなければなるまい。文の数がふえても、すべてこの類型におさまるわけである。また、この中にはかなり特徴的な事実も見出される。第一に、（B）と（E）とが「第二文及び第二文相当個所」「終りから二番目の文及び二番目相当個所」という形でとりあげられるということがある。この二つのばあいに限り、破調の音の文が二つ以上連続してみられるのであり、それを「相当個所」という名称であらわしたわけである。他の、A・C・D・Fのばあいにはこうしたことは見られない。段落の始めからにしろ、終りからにしろ、二番目という位置に共通して、こうした事実の見られることには注目せざるを得ない。第二に、（A）と（F）について、例5・6及び例15・16や例14のばあいのように、同型の段落を連続してくりかえすということがあるのではないかということがある。第三に、（A）について、第一文の破調の音の文に続く、第二文が接続詞をもって始められるということがある。他のばあいにも、たとえば例9や例26のように、破調の音の文に続く文が接続詞で始まる例は見られる。が、それはすべてではなく、むしろ少数例の側に属するのである。第一文が破調の音である（A）の特殊性が考えられるのではあるまいか。終りに、第三文が破調の音の文であるという類型を見出せないことが注目される。終りから三番目の文が破調の音の文であるという類型はあるのに、この類型は見出されないのである。

まとめて言えば、第一に、類型はかなり整然としており、（B）と（E）という対比や（A）と（F）という対比も可能であるという点が注目される。第二に、（A）という類型は、そのところで述べたように内容との関連に問題があり、端的に言えば、音調をも含む形式の上のみではなりたたないのではないかということ（《F》についても内容との関連という点で考える必要がある）。第三文が破調の音の文である類型が見られないことをあわせ考えて、破調の音の文のあらわれる位置に制約があるのではないかと考えられる点が注目されるのである。これらはいずれも混合の段落においても、破調の音の文がでたらめにあるわけでなく、そのありようにかなり整然たるとといのあることを、音声という面において示しているものであると考えられるのではなかろうか。もちろん、こうした傾向は絶対的な傾向ではない。内容の要求するところなどにより、形式が動かされることは当然あり得るとしなければならない。にもかかわらず、こうした傾向のあることも無視できないと思うのである。

終りに破調の音の文が、一段落中に二度以上あらわれるばあいについて簡単に記しておきたい。すでにあげたものを除いて十例ある。

25　日本橋の仮橋へ来た。土台を築くために囲をした、其中へ浸み込む水を石油エンヂンで絶えず汲み出して居る。亜鉛板の変に反りかへつた屋根から、細いのと太いのと二本の煙突が出てゐて、細い方はスポッ〳〵と勢ひよく蒸気を吐く度震へて居た。そして太い方は赤さびて、其頭から元気のない烟を僅かにたててゐる。（121・上）

「タ・ル・タ・ル」が見られる。「○・×・○・×」の形である。他に同じ例はない。が、すでにあげた「タ・ル・タ・ダ・タ」の「ダ」を破調の音と認めれば類例となる。また、前に示すことだけしておいた「ク・ル・ス・ル・ス」のうちに「ル・ス・ル・ス」という部分を見出すことができる。他に「タ・ル・タ・ル・タ・タ・タ・タ」「ム・タ・ル・タ・タ・タ」「タ・タ・ム・タ・ル・タ・ル・タ・タ・タ」「タ・タ・タ・イ・タ・ム・タ」に「タ・ル・タ・ル」「ム・タ・ル・タ」「ム・タ・ル・タ・ル・タ・ル・タ」「イ・タ・ム・タ」という部分が見出せるとも言えよう。一応、基調の音の文と破調の音の文とが交互にあらわれる段落もあるとして処理しておく。

以上の他に、例外ともいうべきものが四例見られる。「ウ・ル・タ・タ・タ・タ・タ・タ・タ・タ・タ・タ・タ・ル・ク・タ」が一例、「タ・イ・タ・タ・ル・イ・タ・タ」が一例、「タ・タ・タ・ル・ル・タ・タ・タ・ル・ル・ル・タ」が一例、「タ・タ・タ・タ・タ・タ・ル・ル・ス・ル・タ・タ・タ・ス」が一例というように見られる。従来の分類を組み合わせれば説明のつきそうなものもあるが、類型として指摘することは困難である。例外とする。一般に、一段落中に、二つ以上の破調の音の文がみられるばあい、そのありようはさまざまである。四つの、例外と認める例も出て来たわけである。が、これは三百七十二段中の四段にすぎない。混合の段落にかぎってみても、六十四段の一割にもみたないものである。こうした例外のあることによって、以上の調査が無意味であったとも思えないのである。

第一の作業において、「暗夜行路」は、音調の上での強弱、速度の変化に富むものではないかと述べた。第二の作業においては、文の末尾の音が「た」という一定の音のみである段落が多く、また、破調の音の文がまじる段落においても、少くとも一回だけ破調の音の文があらわれるものについては、その段落の構成がかなり整然としたものであると考えられた。段落の構成自体について言えば、安定性が見出されるということもできよう。変化に富んだ様相と安定性の認められるありようとの程よいバランスが、ここにはあるのだということはできまいか。

特殊な考察であり、不十分な点も、気のつかない点も多く見られると思う。一つのこころみとして御叱正をいただければ幸いである。

〔付記〕　本稿は、昭和三十八年になった初稿をあらためたものであり、その後、昭和四十三年に「表現研究」第七号に掲載された「段落論ー文章研究のためにー」に先立つものである。本稿が段落の形式面に対する考察であるのに対して、「段落論」は、その内容面に対する考察ということになろうか。両者の接点となるところに、段落の持つ複雑性がひそんでいるように思われる。